

『朝鮮活字標本』（九州大学附属図書館 春日政治・和男文庫蔵）

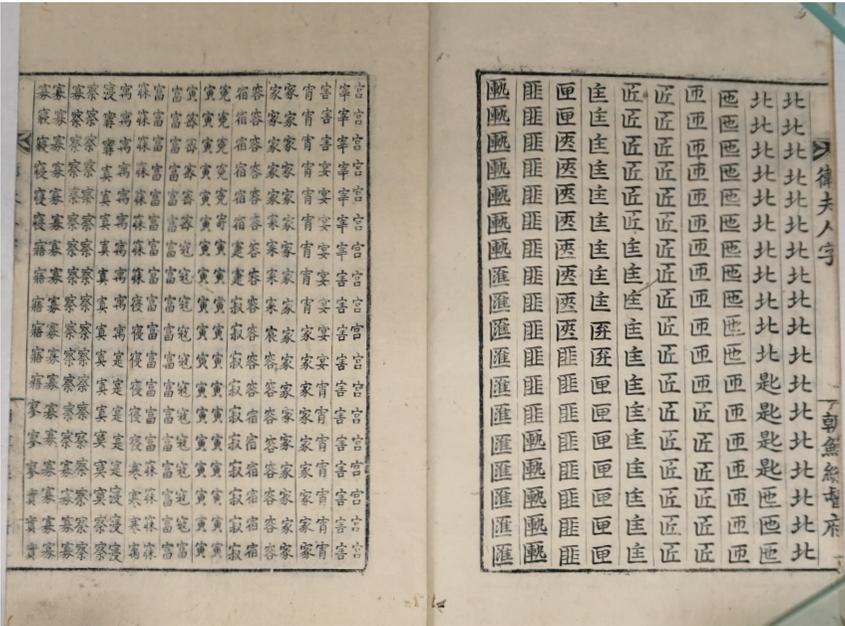
蛭沼, 芽衣  
九州大学 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/2547982>

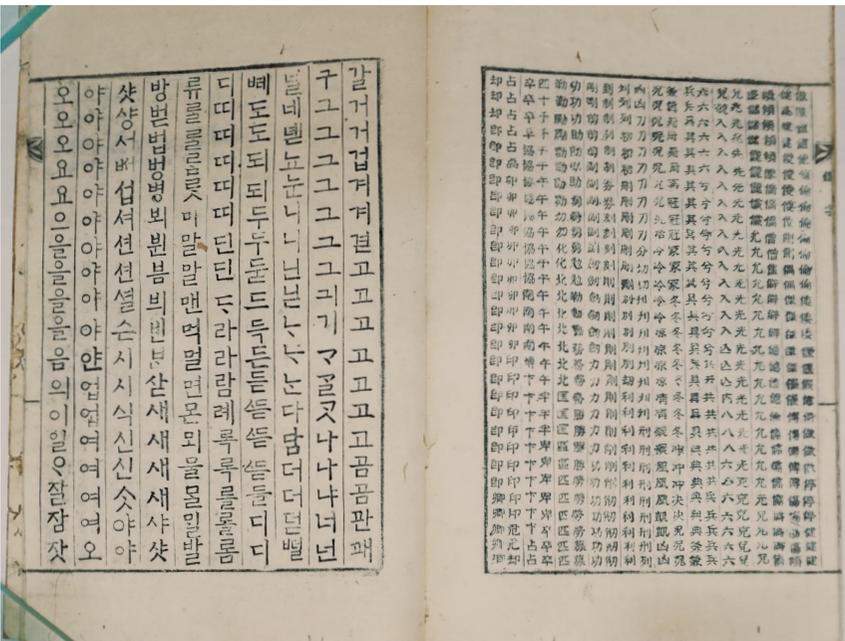
---

出版情報 : 文献探究. 56, pp.1-, 2018-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

『朝鮮活字標本』 (九州大学附属図書館 春日政治・和男文庫蔵)



衛夫人字 (大・小)



右鐵字 (小)・左諺文 (大)

# 解説

蛭沼芽衣

日本の活字印刷の歴史は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって朝鮮半島から持ち帰った、金属活字に始まる。朝鮮半島での金属活字印刷の歴史は古く、高麗末期の一三七七年に印刷された『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』までさかのぼることができる（これは世界最古の活字印刷資料でもある）。日本ではその後、資材として潤沢にある木を用いた木活字に姿を変え、また江戸時代の早い段階には整版印刷のほうが一般化してしまうが、朝鮮では、金属活字の鑄造が盛んにおこなわれる。金属活字の鑄造は、李朝太宗が一四〇三年に開設した鑄字所でおこなわれ、最後に鑄字された一八二二年に至るまで、十数年に一度の頻度で改鑄がされている。日本のような整版の場合、稿者の字がそのまま彫り出されるため、作品ごとにそのスタイルは変わるが、活字は同じ型によって大量に鑄造するため、字体、いわゆるフォントという概念が生じる（ただし、朝鮮の印刷物は異なる鑄字が混用されている）。口絵掲載の資料は、その朝鮮活字の字体見本といったものであると推測される。

九州大学附属図書館春日政治・和男文庫に所蔵される本資料は、外題・内題・序跋など、書名を特定するものもなく、帙に貼られた題箋を資料名としている。刊年も不明であるが、版心下部に朝鮮総督府（もしくは朝府）とあること、早稲田大学所蔵本の受け入れ印が大正九年であることから、一九一〇年から一九二〇年の間に刊行されたことがわかる。帙題箋には「朝鮮活字標本附解説」とあるが、解説は春日氏旧蔵書のなかには見られない。東京大学文学部漢籍コーナー小倉文庫に所蔵される、この「解説」と思われる「朝鮮活字ノ沿革並ニ印刷法」や京城帝国大学附属図書館の『朝鮮活字印刷資料展観目録』から、残存した活字は朝鮮総督府博物館に収蔵されたことがうかがわれる。

版心に二丁ずつ「衛夫人字」「實録字」「韓構」（一丁のみ）「整理字」「鐵字」とあり、本文にそれぞれの大字・小字が一丁ずつ（韓構は大字のみ）印刷されている。このほかに無名の（版心のない）字やハングルもある。「衛夫人字」とは、中国晋代の書家であり、王羲之の師でもある衛夫人の字を範としたもので、「韓構」も李朝肅宗時代の人物である韓構の字をもとにして作られたものである。「實録字」は、歴代の朝鮮王朝の実録を印刷したためにこのように呼ばれる。「整理字」は、康熙字典を字範につくられた木活字（これを生生字という）をもとに鑄造されなおしたものである。朝鮮の金属活字の多くは銅であるが、補欠のために鉄や木活字も作られていた。「鐵字」とあるのは鉄による活字であろうか。それぞれの字の配列順は不明であるが、似た字形のものから並べているようである。

〈参考文献〉

京城帝国大学附属図書館編（一九三二）『朝鮮活字印刷資料展観目録』

中山久四郎（一九三〇）『朝鮮印刷史』『世界印刷通史 第二卷』三秀社

吉田光男（二〇一一）『朝鮮本の世界』『東アジア書誌学への招待 第二卷』東方書店